

101年目の石狩岳、石狩川、石狩沢 再び大島亮吉の足跡をたどって



北西尾根から見た石狩岳(中央)と音更山(左)

大島亮吉が『石狩岳より石狩川に沿って』に描いた山旅から100年になるのを記念し、北海道支部の支部山行でその前半部分の足跡をたどったのは2020年7月のこと(『ヌプリ』51号)。それから1年後の2021年7月末、私たち4人(藤木俊三、山崎邦子、田中智子、田中健)は前年の行程に続く部分をたどる山行を行った。

今回私たちが歩いたのは、石狩川から石狩岳、音更山を越えて由仁石狩川に降る、大島たちが1920年7月25日から26日にかけて歩いた行程。幕営地も大島たちと同じ場所を計画していた。前回に比べルートがはっきりしない部分があり、近年あまり人の入っていない箇所も多い。夏道のない石狩岳北西尾根はハイマツ漕ぎが鍵になるとは考えていたが…。

旧・石狩沢の細い水脈を辿って

7月30日、私たちは大雪湖そばの大雪山道路情報センター横にテントを張って前泊した。夕刻、このテントサイトを、翌日石狩沢から石狩岳に登る予定の京極紘一さんたちが訪れてくれ、「明日、石狩岳の山頂で会えたらいいですね」と話して別れた(結局は会えなかったのだが)。

翌31日5時過ぎ、私たちは昨年の山行終了地点であるヌタプヤンベ

ツ川と石狩川本流の合流点付近にいた。大島が憧れの石狩川本流と出会い、犬を連れた二人のアイヌと邂逅して感激した場所である。天気は上々、暑くなりそうだ。

大島たちは101年前、この付近の石狩川本流から支流の「石狩沢」に入り、これを遡って石狩岳へ向かっているのだが、この「石狩沢」がどの沢を指すのか?は意外と知られていない。普通に考えると、現在の地形図に「石狩沢」と書かれ、この日も京極さんたちが遡る予定の石狩岳への直登沢(以下「現・石狩沢」)のことでは?となるのだが、実はそうではない。なぜなら大島は『石狩岳より』にこう書いているからだ。

アイヌと別れて合流点より左岸の林中を下流に沿って少時降ると対岸に小さな沢の再び合流するに遭った。これが石狩沢である。

つまり、石狩川本流と「石狩沢」との合流点、ヌタプヤンベツ川との合流点よりも本流の下流にあると言っているのだ。しかし、現・石狩沢の合流点は、ヌタプヤンベツ川の合流点よりも上流である。不思議に思つて、大島たちが持参した『山岳』12年附図や、大島とともにこの山行に参加した田中三晴の編纂にな

る昭和初期のガイドブック『北海道の山岳(登山案内)』を見ると、意外なことがわかる。現・石狩沢は真正昭和初期には「大石狩沢」と呼ばれており、当時「石狩沢」と呼ばれていたのは、現在の地形図では無名の、石狩沢と音更沢の間にある短い沢(以下「旧・石狩沢」)だったのだ。当時と現在では沢の名前が変わってしまったているのだ。大島たちは、この旧・石狩沢から石狩岳の北西尾根に出て山頂に達したと思われる。

そこで私たちも、まずは旧・石狩沢を遡らねばならないわけだが、500mほど下流の地形図上の合流点まで行ってみても、そこには何もな



石狩川本流から旧・石狩沢へ

い。このあたりの石狩川は2016年の台風で甚大な被害を受けて19年まで林道が不通になっていたほどで、かなり地形が変わっている。もっと上流寄りの藪の中の細い流れが旧・石狩沢だった。今も「小さな沢」である。

直ちに石狩沢の細い水脈を辿って廻り始める。石狩沢と言ってもそれは決して顕著な沢ではなく本流に沿って来てもうっかりしていれば見出し難い程のものである。沢は両側に繁茂する針葉樹に蔽われて水面などは薄暗く、朝霧に濡れそぼれたイタドリ の群生を分けて登るのは極めて無気味だ。

少々藪を漕ぐと開けてはくるが、水量はかなり少ない。倒木が多く、



旧・石狩沢を渡る

藪もかぶり気味で、全くすっきりしない。北向きの沢なので暗く、沢登りの楽しみは皆無に近い。

登れば益々傾斜は加えて来るが、だんだん水量は減じて来る。沢を左へ左へと登って来た様であるが地図が簡略なためにどこをどう登るのか少しも解らずた嘉助の臆気な記憶に依頼するのみで甚だ心細い。

この「簡略な」地図というのは『山岳』12年附図のこと。この文章からはルート取りが案内人の成田嘉助に一任されていたことがうかがえる。

私たちの廻る沢も1250m付近ではほぼ直角に左折して東を向き、正面から日の光を浴びる形になる。沢水はいったん伏流したりして、さらに水量を減らし、1400m手前で遂にはば水流がなくなる。ここで水を補給したが、今夕は沢を降って幕営予定だからと、行動中に飲む分しか汲まなかったのは失敗だった。

樹枝の緑の集団の間から真直の前面に大きな残雪の輝きが眼を射る。忠別岳のあたりらしい。

私たちの真後ろに残雪を帯びて聳える立派な山は、忠別岳ではなくトムラウシ山。もっと上部で谷の向き



トムラウシを背に

が変わると忠別岳も見えてくるが、こちらにはほとんど残雪は見えない。

1430mの二股からは、北西尾根のコルに上がる左股ではなく1710mのピークに上がる右股へ。沢形がよりはっきりしており、石狩岳の山頂へ近いので稜線の藪漕ぎが少なくてすむかも、という思惑だが、すぐにナナカマドなどの灌木やササが被さるようになってしまい、割とはっきりした鹿道を頼りに小尾根上を1710m峰へ登っていく。

ハイマツの山稜を伝って

一直線に四十度近くもあるうかと云う急斜面をナナカマド、ミヤマハノキなどの密生を分け、それらの樹枝を手頼りに漸く這い登って前石狩岳に連亘する山稜の一点に達したのは九時三十分で、石狩川畔よりは約三時間を要している。

私たちが北西尾根の稜線に達したのは10時過ぎ。石狩川畔から5時間近くかかっており、大島たちより

を伝って漸く十二時意外な時間を費やして前石狩岳と石狩岳の鞍部に遥か下の山麓に辛くも残存している残雪を目的にして昼餉をすることにした。

私たちがコルに着いたのは15時30分。陽もだいぶ傾いて薄暗い。稜線に出てから3時間で来た大島たちに對し、私たちはもう5時間半も稜線の藪を漕いでいる。60代中心の私たちと20歳前後の大島たち（最年長の嘉助でさえ40代）の体力差が。疲労困憊してコルで大休止するが、残雪はどこにも見当たらなかった。

前面に深く暗い谷を隔ててユート二石狩岳がその端麗な山容を眼近く聳えさせ、山頂の三角櫓さえも明らかに指示することが出来る。（中略）やや左に位置してヌタクカムウシユベが大きく肩を張って真夏の強烈な日光に鋭い残雪の輝きを見せている。

『石狩岳より』にはそうあるが、音更沢（大正期の名称は前石狩沢）の谷を隔てて私たちの前に聳えているのは、先ほどと同じ音更山だ。ユート二石狩岳はここからは見えない。では大島が間違えたのかというと、そうではない。当時は音更山とユート二

かなり遅い。暑さも相まって、皆かなり疲労している。ちなみに、大島が前石狩岳と書くのは北西尾根上の1824m峰のことらしい（『山岳附図』とは位置が大きく異なるのは大島の書く通り）。

灌木の茂った稜線に乗っ越して東側に出ると木がなく、眼前に大きく音更山とボン音更山が立ちほだかる。右手には、尾根通しに石狩岳も初めて見えてくる。稜線のこちら側は笹や灌木の藪も低く薄いので、斜面をトラバース気味に進むが、傾斜は急でザレしており、藪で足下も見えず、思ったほどスムーズには進めない。

1710m峰の山頂近くまで来ると、北西尾根と石狩岳の全貌がはっきりする。翼を広げた猛禽類のような石狩岳は、どこから見ても立派だ。山頂の右下、現・石狩沢の上流部に細く残った雪渓が一直線に小石狩岳に突き上げてるのが印象的（表紙写真）。京極さんたちの姿がそこにないか目を凝らしたが見えなかった。

その頃、京極さんたちは既に山頂に達し、逆に私たちの姿を望遠レンズで捉えていたことを後から知った。1824m峰（前石狩岳）へ続く稜線上はハイマツと思われる濃い緑色の部分が多いが、左の沢形は緑色が淡く土も出ており、稜線の右にもハイマツが薄そうな部分が見える。

石狩岳（中央）を目指して北西尾根を進む。左が前石狩岳（1824m）



コル（1650m）までの緩い降り は藪が薄く、鹿道もはっきりして歩きやすい。ハイマツも丈が高く枝が少なく、難なく下を通り抜けられる。しかし、コルからは猛烈なハイマツ漕ぎが待っていた。左の沢形に入るにはいったん降らねばならないので思い切れず、結局、ハイマツの一番濃い尾根のてつべんに追い上げられる。

山稜にはナナカマド、ミヤマハノキの密生する間に偲松のひねくれた樹枝が思うさまにのさばりかえつていてその通過の困難は容赦のない日光の直射を加えていや増し、非常な疲労とたえがたい喉の渇きに身体はへとへとになってしまった。

ハイマツはまさにこの通りで、枝の上に乗って渡って行くこうにも、重荷にバランスを崩し、度々枝の隙間に落ち込んでしまう。直射日光は強烈で、喉はからからになり、どんどん飲み水が減っていく。藪漕ぎは、メンバーがピツタリとくつついて先頭交代しながら進むのが労力軽減にはいいが、私たちは4人がバラバラになってしまう。それでも右へ右へと、前石狩岳の山頂を巻くように進み、石狩岳山頂とのコル（1800m）を目指す が、すぐそこのように見えて、全然近づかない。

漸く偲松を泳ぎ越し、それから解放せられると又草いきれのする暑く熱った草地を過ぎり絶えず山稜

ハイマツを漕いで



狩岳の呼び名が現在と逆だったのだ。当時の音更山は現在のユート二石狩岳で、当時のユート二石狩岳が現在の音更山つまり大島がユート二石狩岳と書いているのは、今の音更山のこと。山頂に三角点測量用の櫓があったことからも、音更山のこととわかる。三角点は音更山山頂にはあるがユート二石狩岳山頂にはない（もともと、この音更山山頂の一等三角点の点名は当時も今も「音更山」。ちなみに、大島も書いているように石狩岳山頂に三角点はない）。また、ヌタクカムウシユベⅡ表大雪は、音更山のやや左という位置関係にないので、これはニセイカウシユッペ山の間違いではないか。眼の前に見える音更山だが、そこ

までの道のりはまだ遠い。あの山の向こう側の幕営予定地まで、とても今日中にはたどり着けそうにない。

石狩岳の山頂に立つ

コルからの道のりは格段に楽になる。稜線上にはまだ薄くハイマツが続いているが、右の斜面の数は膝下程度。全然ないところも多く、そこをつなぐように登っていく。稜線の傾斜はきつくて疲れた身には辛く、あまりペースは上がらないが、細く平らな山頂稜線は確実に近づいてくる。振り返れば、登ってきた稜線がくっきり見える。



間近に迫った石狩岳の山頂稜線

著しく狭く両側の傾斜は恐ろしく急峻を加えて荒寥とした山嶺の景趣を備えて来た。幾つも幾つも岩稜の小隆起を越えてゆき、遂にその最高点と思わるる岩稜の隆起に達したのは正二時であった。

非常に急傾斜の草地を喘ぎつつジグザグをして登りつめて漸く石狩岳にとりつき始めると、もう草地はなくなつて假松の蒼黒い叢生と黒くイワゴケなどの付着した岩石の堆積のみで、その岩石の崩壊して細かい砂礫となった様な斜面には駒草がかがやかし光線を一杯に吸い込んで、その小さい淡紅色の花弁は可憐な生命のようこびに顫えている。

少々大げさな表現だが、確かに小隆起は多い。私たちが山頂（1966m）に達したのは16時50分。そばのハイマツには京極さんからのメッセージが縛りつけられていた。

夕闇が迫り、また雲と逆光で見にくいが、大島が山頂からの眺望の描写で言及している表大雪やトムラウ

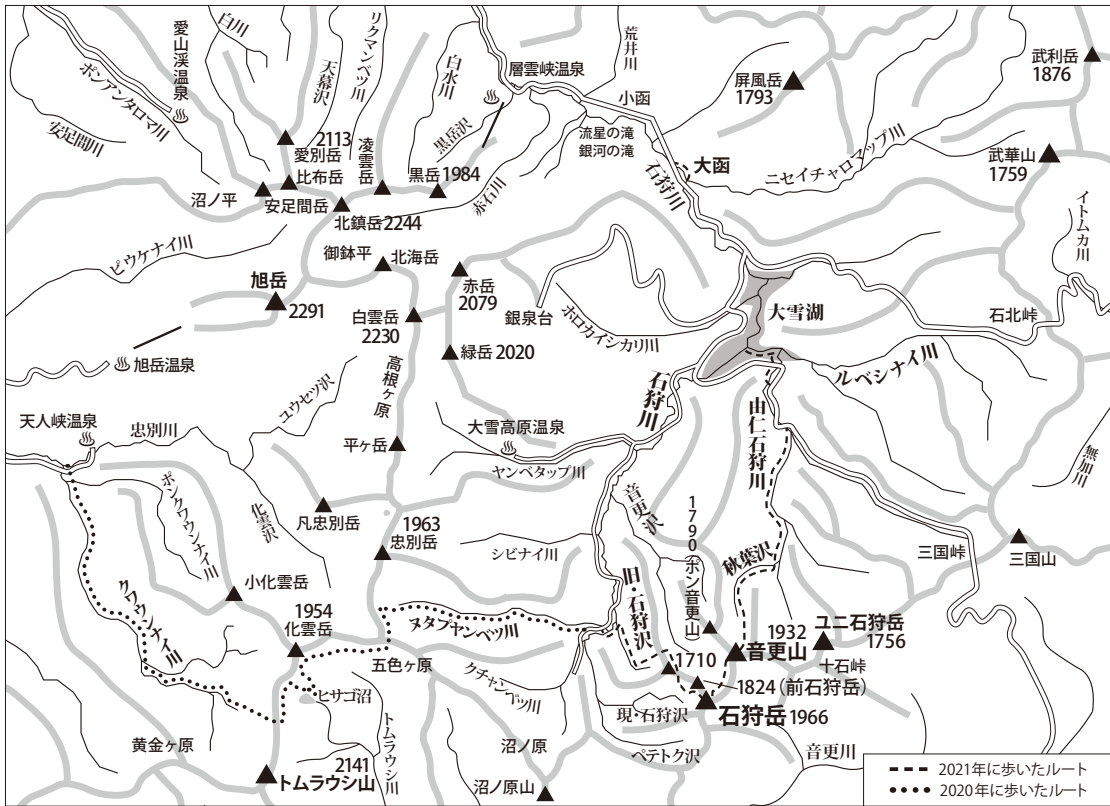
シ、そして十勝岳連峰は見えている。とりわけ左端のバナクシポロカメトクヌプリ（現在の下ホロカメツク山）は目立っている。南のニベソツ山、北のニセイカウシュッペ山や北見岳（現在の武利岳）は霞んでいるものの何とか見ることができたが、低いユクリヤタナシ（現在の北見富士）は暗闇に沈んで判別できなかった。

十勝方向に流れ下る音更川も確認できるが、大島が「オトブケの流域は鬱々として蔽うた暗緑の深林のうちを黒い細条をなして牢獄のような暗い峡谷が深く穿ち流れている」と書いたような恐ろしげな雰囲気ではないのは、今は針葉樹の大森林が失われてしまっているからだろうか。

眼界に入るものはただ硬い岩石や冷たい雪、或いは又陰鬱な森林に蔽われて、人間味の少ない或いは全くこれまで人間との交渉を少しも有していない山々谷々のみであることを知り、しかもその奥深い核心をなすこの地点に立つ自分たち四人の存在を想うと一種恐怖の感情にも似た強い自然の圧迫を背々と胸に感じないわけにはゆかないのである。実際に石狩岳の山頂よりは全く人間の住地である平原と云うものの片影さえも望見することは出来ない。

この大島の文章は謎というより不可解である。というのも「右・ニベソツ山、左・音更山」という形で稜線が分岐するジャンクシンポイント、まさに今われわれがいる石狩岳の山頂だけで、ここから先に進んだところにはないのだから。

その山稜について深い假松の繁茂をかき分けてユニーニ石狩岳との鞍部に只管下りつづけた。十勝側はすべて峻直な岩壁をなし、処々草地と御花畑を点綴してはいるが全くオトブケの谿までは割り落とされている。假松のひどい処は岩壁を崩み、



当時は道のなかったこの稜線に現在縦走路が開かれているので、ハイマツ漕ぎはないが、表大雪に比べて整備されておらず、標識なども少ない。降りは急で、確かに十勝側音更川側は切れ落ちている。降り始めて20分ほどで、シユナイダーコース分岐近くのコル（1750m）に着く。ここでビバークすることとし、2張りのテントを張る。水は残り少ないので夕食は作らず、各自の行動食や非常食、おつまみなどで済ませた。その夜は満天の星が頭上に広がった。

音更山から由仁石狩川を降る

明けて8月1日、朝起きると昨夜の星空が嘘のように濃霧に包まれ、雨も降っている。視界数十m。朝食抜きで5時過ぎに出発した。

鞍部よりは青黒くイワゴケの付着した大きな岩片の堆積を息もつかずに登りつめてユニーニ石狩岳一八二三米突の三角点に達した時は三時四十分であった。

私たちも縦走路を歩き、岩礫帯の中を登って、6時15分に二等三角点の標柱のある音更山（旧・ユニーニ石狩岳）山頂に着く。ガスで眺望はゼロ。さて、この先のルートについて大島は「ユニーニシカリに降る」としか書

今も石狩岳の山頂から平原は見えないが、恐怖は感じない。大島を魅了した手つかずの原始性は、もはや過去のものではない。

時刻は既に17時を過ぎ、音更山まで縦走して未知の沢を降るには遅すぎる。音更山への稜線の縦走路の途中でビバークすることに決める。

最高点より更に岩稜の隆起を進めば少時して再び假松の叢生は激しく、岩稜は長大な山稜を丁字形に相会している。右は即ちニベソツ山脈に連り、左はユニーニ石狩岳に導くものであり



秋葉沢源流部の岩礫帯を降る

いていない。現在の地形図上の由仁石狩川本流に降るには、まず音更山の東の肩まで稜線を辿らなくてはならないが、大島の文章にそのような記述はなく、また、そこから先は切れ落ちた斜面で、彼らが降ったとは考えにくい。山頂から直接、由仁石狩川の支流、現在の秋葉沢に降ったと考えるのが自然だろう。ということとで私たちも、北西尾根上に以前あったという、ボン音更山（1790m峰）への登山道の痕跡を少したどり、秋葉沢へ向かつて降っていく。

ユニーニ石狩岳の山頂より中腹にかけては花崗岩の岩崩れがこれを被覆して、足場の悪い急峻な下りを急ぐので膝頭がガクガク痛い。

大きな岩の積み重なった岩礫帯を降っていくとすぐにハイマツが出てくる。昨日のトラウマから、なるべくハイマツは避けたいと、岩礫帯から岩礫帯へと繋いでいくが、この濃いガスでは、なかなか避けきれず時々ハイマツにつかまってしまふ。しかし、距離が短い上に、降りなので昨日に比べれば格段に楽だ。そうこうしているうちに 1670 m 付近で秋葉沢の本流に出る。まだまだ岩礫帯だが、ハイマツの恐怖からは解放された。やがてイワブクロなどの花が出てきて、普通の涸れ沢の様相となる。

激しい下りに何時の間にか假松帯は灌木帯にかわり、微かな水のせせらぎも遙かの下に聞こえるのでひとまず安堵の胸を撫で下して進むうち少時して沢を埋めて残雪があり、その下より滴る冷たい甘美な水进行うさま飲んで半日の激しい喉の渇きを医やした。

私たちがやつと沢に水流を見出したのは 1550 m 付近。8 時 10 分に 1530 m あたりで大休止をとつて二日ぶりに水を汲み、朝食の煮麵を作つて、久しぶりにまともな食事にありついた。そこからすぐ、1520 m 付近で左岸側に見つけた長さ 5 m ほどの小さな雪溪が、この



水流の出てきた秋葉沢を降る

日私たちが目にした唯一の雪だった。

それより沢の傾斜は著しく緩やかとなり、少時して漸くガンピの林と路の下生えを見出したので早速そこで野営と決めた。(中略) 標高は二三八七米突を示している。

キンバイが咲き乱れるところを過ぎ、沢には小滝が、両岸には木が出てくる。右岸から支流が合流してくるあたりが標高約 1380 m。フキはあるがダケカンバの林はなく、幕営に適した平地もない。計画では昨晚ここに幕営する予定だった訳だが、夜にたどり着いても、まともにテントを張ることができたか疑問だ。

痕跡さえ見出せなかった。

大島たちは、わずかな水たまりにイワナが群れ集まり、水のなくなつた窪みにイワナが重なり合つて腐臭を放つているという光景を目撃する。

思うにこのユーニイシカリはその幅広い針葉樹潤葉樹に被われた暗鬱な河床のうちを幾多の分流や伏流迷流を形造つて日光を怖るる土鼠の様に森の陰影の暗い処地下の暗黒を求めて日光の曝露を避けつつ流れて来たらしい。

幅広い谷の中を川が伏流と合流、分流を繰り返しているところだけは 100 年前と変わらないようだ。13 時 15 分、1050 m 付近で一氣に谷が開けると、そこは由仁石狩川本流との合流点だった。

右手よりひとつの大きな沢を合流させた流れは漸く純正のユーニイシカリの溪流を形成して来た。

そう大島が書いたのがこのことだろう。現在このあたりは谷幅が数百 m もあるが、水量は少なく、どこを川が流れているのかよくわからない。国道 273 号線からここまででは由仁石狩川林道が来ているはずで、私たちがそこを歩くつもりだが、以前は

さて、大島たちはここに泊まった翌日、1920 年 7 月 26 日の朝、灌木の密林をかき分け、川幅の広くなった流れを進み、明るく開けた場所に出て、衝撃的な光景を目にする。

自分たち一同はただ悚然としてしまった。曠々とした川床の全部を蔽い尽して尚遠い両側の傾斜地までそこには打倒れた巨木が累々と折れ重なり、相横たわり半ば倒れかかつて相互によりかかりつつ刺々しい樹枝を空しげに突き立てている。それが前方にまでずっと続いている。何んと言う痛ましい凄然たる光景であろう。自分は最初この光景を一瞥したとき言い知れぬ戦慄に全身を突き動かされたのである。これらは皆トドマツの風倒木でその樹幹は一間近くの直径が充分にあると思わる程の巨木である。この広大な地域に於いてその巨きな樹々を幼児が玩具を壊す様に手易く或いはもつと造作もなく、吹き払い、なぎ倒し、捻じ折つてこの谷一杯に渦卷いた計り知れぬ強暴な旋風の空と地を震撼せしめた光景を想像して自分はまたも戦慄したのである。

この山行中、各所で様々な光景を目にして感激し、恐怖し、戦慄して

十石峠、ユニ石狩岳へのアプローチに使われた林道は、台風による崩壊で 2011 年から通行止めとなっており、その荒れ具合の程度が心配だ。大島たちはこのあたりで俄雨と雷に襲われ雨具を着たが、今日の私たちはほぼ雨具を着っぱなしである。

そこから下流は水滑かに、幅潤く緩やかなカーブをして針葉樹に多くの潤葉樹を混淆した緑の繁茂の間を環り流れている。(中略) 雨に潤った緑葉の集団が艶々しくまだ灰色だがしかし既に明るい空からの光りに映えて、静かに淀みなく流れてゆく穏やかな水辺に連っている光景は全くとすがすがしく情趣の豊かなものである。

大島は下流をこのように描写するが、私たちのたどる谷筋は荒れ果て、情趣は全く感じられない。

合流点から、だだっぴろい川原の石混じりの林道だったと思しきところを歩いて行くと、谷がカーブするところで法面が大きく崩れている。道がなくなっているで川原に降りて 100 m ほど歩き、再び現れた林道に上がる。林道には一面のフキ。この先にも二、三箇所、同様の崩壊地点を同様に通過する。由仁石狩二の沢との合流点付近の山嶺橋は、手前

いる大島だが、中でもここは最大級に心を動かされた場所だったようだ。自然の無益な自己破壊に神祕を感じて大島は深い感慨に浸っている。

私たちが降る沢も、1320 m 付近で右岸から支流を合わせるあたりから谷幅が一気に広がり、土砂が堆積し巨岩が転がる荒れた溪相にはなるが、大島の書くようなスケールの大きさは微塵も感じられない。倒木は増え、腐りかけた倒木に「もしや大島たちが見た木か？」と反射的に思うが、100 年も残っているはずがない。かつてここに、大島たちを戦慄させる凄絶な光景が広がっていたことを想起させるものは何もなかった。この後、別の形で自然の破壊力の凄まじさを感じさせる光景を目にすることにはなったが。

大島たちはこの風倒木帯を越え、多大な労苦と苦痛をなめつつ野茨の藪を分けて進み、やがて

この暗い巨樹の鬱々たる大森林の深い静けさのうちに吸い込まれる様に這い込んでいった。水脈とは何時しか風倒木を越えているうちに離れてしまった。

(中略) そこには無限と思わるる寂寥があった。かような深い暗い森林の奥底に於いてこそ始めて森林を蔽底とし隠れ所とした吾等の



伏流して水が消えた沢筋

私たちが川原の丈の低い針葉樹やササの中の鹿道をたどるうちに、水脈を離れてしまい、水が涸れて石の詰まった幅広い沢形を倒木を跨ぎ越しながら進んだが、今はどこにも深く暗く静かな大森林などなく、その



真っ二つに折れた夕影橋

の道が崩れて橋と切れているが、橋自体はしっかりと立っていて反対側の林道とはつながっているで、一度道から降り橋に這い上がって進む。

衝撃的だったのは、標高 915 m 付近の夕影橋。見事なまでに真っ二つに折れている。大島が目にした大倒木群とは比べられないが、自然の破壊力の凄まじさに戦慄する。

標高 900 m からさらに川幅が広がり、大崩壊地もある。河岸段丘上の藪を漕ぎ、川原を歩いて国道 273 号沿いの林道入口にたどり着いたのは 15 時 30 分。こうして支部山行としての『石狩岳より石狩川に沿うて』100 周年ツアーはここで終了となった。

大雪湖の中を歩いて石狩川へ

支部山行から 1 カ月たった 9 月 4 日、『石狩岳より』に印象的に描かれている由仁石狩川とルベシナイ川の合流点、ルベシナイ川と石狩川本流の合流点を歩いてみようかと妻と二人で出かけた。先日の支部山行に続く部分で、現在の地形図では大雪ダムによってできた大雪湖の湖水の下になっているが、今は水位が低く、問題なく歩けそう。

大雪ダムから大雪湖を回り込むように車で国道 273 号線を行くと、大雪大橋の上から北側に由仁石狩川が大雪湖に注ぎ込む手前のゴルジュの部分を見下ろすことができる。由仁石狩川沿いに国道をさらに数百メートルほど三国峠方向に行つた所の作業道の入口に車を駐める。雨模様の中、藪を少々漕いで由仁石狩川の川原に出て下流へ、大雪湖の方へ降っていく。広い川幅が次第に狭まり、高くなつた両岸が迫つて来る。1920 年 7 月 26 日、ユニイシカリ（現在の由仁石狩川）の流れを降つてきた大島たちはここにたどり着き、

遂に再び両岸より山側が次第に迫つて来るのを見たとき自分の心は秘かな悦びに満された。



ルベシナイ川との合流点へ向かって

地形の変化によって大島は、留辺蕊峠（現在の石北峠）からの支流（現在のルベシナイ川）との合流点に近いこと、そして石狩川本流との合流点も遠くないことを知って喜んだのだ。

次第に迫つて来た山は頭上を圧し、狭められた水は音高くせせらぎ始める。遂に両岸は黒い岩壁に押迫まられて峽間をなし、泡立ちながらその間を吾がちに躍り込む様に奔下している、岩壁をへずり、深潭を腰まで浸かつてゆくうちに何時の間にかまた峽間は開けて前方が明るくなって河相は以前と同じ姿にかえっている。



石狩川本流が見えてくる

私たちの前方の頭上 30 ～ 40 m ほどに橋が見えてくる。先ほどそこからこちらを見下ろした大雪大橋である。もちろん大島の頃にはなかった橋だ。川幅はこのあたりが一番狭いが、水量も少ない今は、大島の書くような難所ではない。橋のたもとが護岸されている以外は両岸とも土の斜面で、川原には土砂が堆積しているのが難なく通過できる。

両側が開けると、そこはもう地形図上は大雪湖の湖面だが、今は広い谷の真ん中を小川が流れているだけ。右手の谷から流れ下つて来るルベシナイ川も、砂の土手に隠れて水面はなかなか見えない。しかし、近づくと、現在の地形図には表記されない由仁

石狩川とルベシナイ川の合流点が見えきりわかり、そこまで歩いて行ける。

右手より大きな緩やかな流れが会している。これこそ「留辺蕊峠」より発する水系である。

ここからは西へ、谷幅が 200 m ほどもあるルベシナイ川の最下流部Ⅱ地形図上は大雪湖の東にフィヨルドのように延びた部分を行く。両岸の土手は高さ 10 ～ 15 m より下には木がなく、境目がはっきりしている。そこが、水量の多いときの大雪山の湖面なのだろう。境目のすぐ下は草地で、草原状の河岸段丘もある。

川は細かく分流し、川原には土砂が堆積し、濡れずにどこでも歩いて行ける。ちよつと日本離れした、どこかグランドキャニオンを思わせる景観。それは大島たちが 100 年前に見たのとは全く異なる風景だろうが、このルベシナイ川最下流部について大島は「全く不安を洗い流した様な軽い気持ちで膝以上の河心をざぶざぶと流れに押されてゆく」としか書いていない。

両岸が少し迫つた喉のような部分を過ぎると、これまでとは比べものにならないほど開けた、実に広々とした所に出る。石狩川本流の谷、現在の地形図では大雪湖の中心部であ



石狩川本流とルベシナイ川の合流点

る。対岸までは 500 m ほどもある。雨脚がはつきり見えるほど強くなってきたが、干からびてひび割れた旱魃地帯のような地面には薄く草が生え、鹿の群れの足跡が道になっている。

そうするうちにまた前面より幅瀾い河床を有った大きな河が折柄の斜陽にその水面一杯を宛で金色の流れの様に輝かせて静かに流れながら展開されて来た。再び自分たちはこの陰惨な針葉樹の下蔭の藓苔の間から滲みでて、森林の暗さを通り抜け峽谷の間を奔馳し平原を緩やかに迂曲しつつ遠く海にまで流れゆく石狩の大河のまだ荒々しい表情をした上流の姿態を眼にすることが出来たのである。

再び石狩川の本流と出会えた喜びを大島はこう表現している。私たちも、わかりにくいルベシナイ川の水脈をたどり、石狩川本流との合流点を見つけることができた。夕陽を浴びて河面を見つめる一人のアイヌを見て大島が感慨にふけたのもこのあたりだが、今は全く木もなく、モンゴルの大草原かスコットランドの荒地を流れる川のような風景だ。

大島たちはここから石狩川本流を上流へと少々遡り、三角点測量の小屋に泊まっている。そこは、アイヌからイワナを買い求めようとした大島が、金を受け取ろうとしないアイヌの姿勢に、深く自分の行為を恥じた場所である。現在の層雲峡本流林道と高原温泉への道の入口近くと思われるこの場所までも行つてみたかったのだが、かなり時間がかかりそうなのであきらめる。いずれ、大雪ダム方向と合わせて「大雪湖内」を一周してみたいものだ。

東の湖岸近く、水量が多いときには島になる小高い所の上まで、裏の草地から上がつてみる。石狩川とルベシナイ川の合流点付近の雄大なパノラマが眼下に広がった。

往時は大変な難所だった大函

来たルートを車まで戻ると、今度は大函へ向かい、大島たちの山旅の

最大の核心部であった、この石狩川本流の柱状節理のゴルジュの中を私独りで歩いてみた。かつては観光名所だった大函だが、現在は冬に氷瀑のアイスクライミングや見学ツアーで訪れる人はいるものの、夏は水位が高いことも多く、中を歩く人は少ないようだ。

100 年前には層雲峡から上流の石狩川沿いには道がなく、高巻きも難しかったようで、大函（当時は大箱）は大変な難所であった。大島たちは意外に簡単に通過できて、ほつとしていたのだが、それでも水は腰まであった。しかし、今日の水位はすね程度で、新大函トンネルの上流側から下流側まで 1 km ちよつとの行程を 30 分ほどで抜けることができた。現在の大函は、大島の頃よりはるかに容易になったようだ。柱状節理の材木岩や支流の滝の景観は素晴らしくしたが、それよりも、川水から漂う、鼻をつく悪臭の方が気になった。

大島たちはここから小函を通つて、今の層雲峡温泉より下流の対岸にあった層雲別温泉に抜け、数日滞在。悪天候などの理由で、その後の計画をあきらめ、留辺志部（現・上川町市街）まで歩いて旅を終えている。私と妻は翌 5 日、101 年前に大島たちが計画しながら行けなかった白水川を遡つて黒岳まで登った。



大函の入口

帰りのロープウェイ駅には、大町桂月の大雪山登山 100 周年を記念するポスターがあったが、大島亮吉に関するものはなかった。

*

こうして 2 年にわたった大島亮吉の足跡をたどる山旅は終わりを告げたが、機会があればまた、歴史を振り返る登山を行つてみたい。来年は、大島亮吉が再び北海道を訪れて『北海道の夏の山』に書いた山行を行つてから 100 年の節目を迎える。

*

※本文中の『石狩岳より石狩川に沿うて』の引用は全て『山 大島亮吉紀行集』（山と溪谷社・ヤマケイ文庫／二〇一八年）より